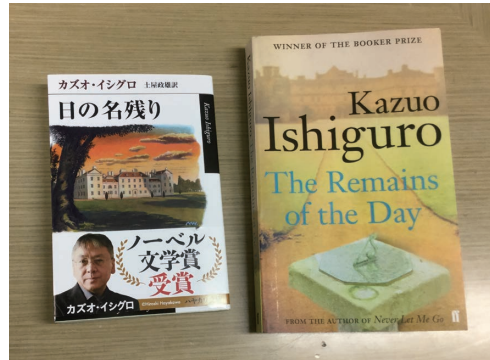




安部 光壹  
Kouichi Abe

## 「日の名残り」(カズオ・イシグロ著) を読んで 過去の記憶の中に自分探しをする物語



1. この小説は、題名のとおりハッピーエンドでは終わらなさそうな小説である。難解な人の名と地名、年代が出てくるのでしっかり腰を据えて、ペンをもって人の名前や年代に印をつけていくなどしないと理解が難しい。しかもストーリーが一人称の「上品な語り口」でゆっくりと進んでいくので、急いで読みたい人には不向きである。しかし、自称英国オタクの私には、長崎出身のイギリス国籍の日本人が、ノーベル文学賞を取ったというので親近感もあり、5歳のときにイギリスに渡った少年のクロスカルチャーとはどんなものか興味をもったので読んでみることにした。
2. この小説は、「偉大な執事」(great butler) とは何か、とか、「品格」(dignity) とは何かが中心テーマとなっており、哲学的あるいは観念的なテーマをもとに物語が進んでいく。ただし、この二つのテーマが本当にそうなのかと言うのは、読み終わってみないと分からない仕組みになっている。  
また、観念的といっても実は、たくさんの歴史的事実があらわれてくる。
3. この物語は、1956年7月を「今」として、ダーリントン家という200年以上続いたイギリスの名家に35年以上執事として仕えたスティーブンスという人物が、過去、記憶

を回想していくというストーリーである。

4. スティーブンスは、ダーリントン家の新しい所有者となったアメリカ人実業家ファラディ氏から、一週間程の旅行を勧められる。ファラディ氏は、スティーブンスを含め、4名の雇人を屋敷とともに譲り受けたが、5週間ほどアメリカに帰るので、その間旅行に出てもいいと水を向ける。

スティーブンスは、今更イギリス各地を見て回りたいという気持ちは無かったが、以前17人もの雇人がいたダーリントン家に今や4人しか残っておらず、少なくとも一人はリクルートが必要なことや、20年前にこのダーリントン家を去ったミス・ケントン（現在は結婚してミセス・ベン）から、彼女がダーリントン家に郷愁を感じていて、しかも今の結婚生活が必ずしもうまくいっていないニュアンスの手紙が来たことから、彼女が住むコーンウォール州リトルコンプトン（ロンドンから車で6時間）に行き、彼女にダーリントン家に再就職してくれるよう依頼する（しかし、内心は彼女に対する思慕があったのかもしれない）という用件を思いつき、旅に出るのである。

つまりこの物語は、ダーリントン家があるオックスフォード州から西の方へ、ソールズベリー、ノーセット、サマセット、デボン、コーンウォール、ウェイマスと大西洋へと向かう旅の物語である。

余談だが、私は以前、ロンドンのパディントン駅から大学の先輩が留学しているブリストル（ブリストル大学）へ旅行したことがある。その時の印象は、イギリスという国は、何と愛想がなく、ドライで、孤独感が潜む国かと思ったのである。日本がウエットで相手がどんな人か、言葉を交わさないでもなんとなくわかる、いわば寄り添う社会とは違う国であることを感じた。そういう国にこそ、三権分立やrule of law（法の支配）が必要なのではないかと考えたのである。私は、そんな思い出もあって、イギリスの地図と鉛筆を置いて、スティーブンスがドライブした街を追っていった。

5. 休暇をもらったスティーブンスはまずソールズベリーの宿に泊まる。しかし、ここから、この物語は普通の旅行記とは違う様相を呈する。

私の期待する（！）イギリスの古風な田園風景や、家屋敷の描写ではなく、「偉大な執事」（great butler）とは何か、「品格」（dignity）とは何か、といったスティーブンスの自省が始まるのである。この物語は、彼が35年間培ってきた「執事」の本質を問い直そうとするものである。

そして、それを裏付ける記憶や過去の事実が具体的に述べられることになる。このダーリントン卿は元外交官らしく、第一次世界大戦及びその後、第二次世界大戦が始まる頃の非公式交渉場として彼の住むダーリントンホールが使用さ

れており、そこに、各国の政界、財界、芸能界などの著名人が訪れ、執事であるスティーブンスはその準備や運営について完璧なおもてなしをする。そのことを通じて執事とは何かを自省していくことになるのである。そのキーワードが、「品格」である。

しかし、考えてみれば「執事」という仕事は、いわば黒子であり、自分の「人格」(意思)を表に出さないのを本来の姿としている。ところが、スティーブンスは、自分の職業を振り返ること→自分の過去を振り返ること→自分を振り返ることを行っているわけである。結局、この小説は、自分を表に出さない執事という職業を逆手にとって、読者に自分探しへの興味の道案内をさせているのである。難解なストーリーの中から、カズオイシグロのひねりにひねった語りの技法を読み取ることになる。

6. 人は、いくつになっても「自分は何者か？ (Who am I ?)」と自省するとき、若さを感じる。昔読んだ、シェイクスピアの「リア王」のストーリーの最後のシーンで、子供達に裏切られたリア王が、たった一人(側には道化がいたが)岩壁に立ち、嵐の中「俺は一体何者なんだ」と叫ぶシーンがある。私はこのとき、リア王は孤独で悲惨というより、なんてカッコイイ!と思った。その時は、その理由はわからなかったが、後になって考えると、人は、「自分は一体何者なんだ」と考えるとき、人は決して若さを失っていないと感じたからだ。(因みに、このとき側にいた道化は、「あんたはリアの影法師たい! (博多弁)」と言ったとのことである。これも面白い。)

7. 「日の名残り」の話に戻ると、この小説は、スティーブンスが第1宿泊先のソールズベリーに泊まった後、風景の描写はあまりなくスティーブンスの記憶と過去の語りが主軸になっている。

そこで私が気付くのは、この「過去や記憶を語る」という手法は一種のエネルギーを生み、それが読者に伝わってくるという驚きである。

過去を振り返ることで読者にエネルギーを与えるという物語の手法がこれまでにあったのだろうか、という妙な感慨が湧いてくるのである。

8. この記憶と過去の追憶の原動力となったのは、スティーブンスが、「自分は執事として品格があったのか、そのためには自分が仕えたダーリントン卿とはいったいどんな人物だったのか」を振り返る力であった。

しかし、その回想の仕方は、ダーリントン卿の行動が正しいか正しくないのか、不正なのか、背信的なのかとかいう評価ではなく、外交交渉の場でダーリントン卿がどのような発言をし、他国の大臣や外交官が、どのような発言を行った

かを客観的にかつ子細に描写するだけなのである。あくまでも執事の立場でダーリントン卿を描写している。その描写は具体的であり、歴史小説を読んでいるようでもある。

善良なダーリントン卿の思いとは異なり、彼が反ユダヤ主義に加担していたと社会から評価されるが、スティーブンスはダーリントン卿をその人として擁護し、その執事としてその職務を全うしようとする。

些かストイックすぎる自己犠牲の精神とも思える。それを大方の専門家（特に書評を書いた丸谷オーなど）は、「ミス・ケントンのスティーブンスに対する思慕や、スティーブンスのミス・ケントンに対する思慕が明らかになっていくと同時に、自分の考えていた倫理観、職業観、社会観が崩壊していく、即ち、自己が正しいと思っていた価値の崩壊へとつながっているように思える」と評価している。

しかし私は、スティーブンスが自分の過去や記憶を検証する中で色んな思い違いを発見しながらも、それを許容し、半ば諦めていることにこの小説の真の意味を感じるのである。美しく上品な老女となってスティーブンスの眼前に現れたミス・ケントンが、ダーリントン家に勤めていた当時、自分の思いがスティーブンスに伝わらなかった瞬間を悔やむ場面がある。しかし、それは、スティーブンスにとっては、それは人生の大きな後悔とはなっていない。スティーブンスは目に涙を浮かべるが、それは一つの認識をただけのことであり、人生を捨てるというまでの後悔ではない。

それよりも、彼は、ミセス・ケントンがベンと結婚した当初、結婚したことに後悔し、三度も家出をしたことを気にしている。ミス・ケントンは、ごたごたした結婚生活が、一年一年が過ぎていき、戦争があり、娘が成長するにしたがって、ミス・ケントンが夫を愛していることに気付いた。(342頁) …夫を愛せるほどに成長した(345頁)と述べている。結局、スティーブンスは、彼女のこのような人生を全て肯定しているのである。このようなスタンスは決して後ろ向きでもネガティブでもない。

9. カズオイシグロは、自分のアイデンティティを探すのに歴史的事実をふんだん（贅沢）に活用している。この小説は、1923年、第一次大戦後のドイツ、フランス、イギリス、そしてアメリカとの力関係、そして、その後のヒトラーの台頭について、ダーリントンホールを中心にした外国代表者の演説などを極めて詳細に描いて歴史小説と言ってもいいほどである。スティーブンスは執事として、それを目の当たりにして、これを追憶の形で描写している。

読者にとっては、スティーブンスの自分探しの小説が、第1次世界大戦の舞台裏の交渉を目の当たりに見る興奮も味わえるので、読者サービスも巧みだと

言える。

10. 旅行記は、とうとう最終の6日目を迎え、フィナーレはスティーブンスがミス・ケントンと再会し、再び、ダーリントン家で働くのをお願いできるのか、彼女からスティーブンスへの思いを聞くことができるのか（ハッピーエンドで終わるのか）それとも冷たい拒絶に会うのか、読者はどうしてもその点の結末を知りたくなる。

作者は、そのような読者の思いをさらりとかわし、一挙に時間を経過させ、ミス・ケントンと会った二日後にたった一人で、夕方ウエィマスという港町にたたずんでいるという設定をしている。つまり、コーンウォール州のリトルコンプトンでミス・ケントンと会った後彼女を連れて帰るという本来の目的は水泡と消えたことが示唆され、その時の別離のシーンを回想するという設定になっている。なかなか手の込んだ設定ではあるが、そのじれったさでまた、読者を引き込んでいるともいえる。

スティーブンスは、その港町で、一人の老人と会うが、その男は、落胆しているように見えるスティーブンスに、思いついたように、夕方が一番いいと語り掛ける。なぜなら、行きかう群衆は、栈橋に明かりがついたのに歓声を上げ、夜の帳を待ち望んでいるからだという。それは単に慰めから出た言葉だろうか。

その二日前、スティーブンスはミス・ケントンに、会ったときに、あなたの人生は虚無 (emptiness) だったかと問いかけた。すると、「彼女は私の人生は虚無となって広がってはいません。何と言っても、もうすぐ孫が生まれますもの。」と答えている、逆にミス・ケントンは、スティーブンスに「ダーリントンホールでのあなたにはどんな将来が待ち受けているのでしょうか。」と問いかける。スティーブンスは、「さて、何が待ち受けているにせよ、それは、虚無 (emptiness) ではありませんまい。私などは、そうあってくれればと願わないでもないですよ。しかし、とんでもない。仕事、仕事、また、仕事でしょう。」(339 頁) と答えている。確かに、強がりと言っているようにも聞こえる。スティーブンスは、彼女が今は幸せであると聞いた時に、自分の執事としての忠実さが逆に大切な人を失わせたという後悔がはしり、「私の心は張り裂けんばかりに痛んでいた」(343 頁) のも真実と思える。しかし、しかし、この小説は、そのような後悔で終わっていない。

スティーブンスは、この小説の終わりのころに次のように述べる。「人生が思い通りにいかなかったからと言って、後ろばかり向き、自分を責めてみても、それは詮無いことです。私どものような卑小な人間にとりまして、最終的には、ご主人様の—この世界の中心におられる偉大な紳士淑女の一手に委ねる以外、あまり選択の余地があるとは思えません。それが冷厳なる現実というものではありませんまいか。あのときああすれば人生の方向がかわっていたか

もしれないーそう思うこともありましょう。しかし、それをいつまで思い悩んでいても意味のないことです。私どものような人間は、何か真に価値あるもののために微力を尽くそうと願い、それを試みるだけで十分であるような気がします。そのような試みに、人生の多くを犠牲にする覚悟があり、その覚悟を実践したとすれば、結果はどうあれ、そのこと自体自らに誇りと満足を感じてよい十分な理由となりましょう。」(351頁～352頁)と述べている。

冒頭に私はこの小説は記憶と過去の述懐小説と言った。確かに、自分の後ろ盾になる主人の描いた世界はその目的を遂げず、主人自体政治的な攻撃を受けることになった。また、スティーブンスのひそかに思慕した女性は、ついに彼のもとに戻らなかった。

彼の述懐は、後悔に似たものとなっているが、しかし、決して彼はそこから逃げていない。彼は人生をそのようなものであると享受している。そこに、私は、彼が執事という黒子のベールを脱いで、人間として自分探しに成功し、人間としての魅力を深めているような気がする。執事とは人間性を捨てたところから始まるという既成の概念を利用しながらも、人間はどんなエライ人であれスティーブンスのような人間性を捨てた(隠した)と自覚した中に、人間性を自覚するものであると述べているようでもある。そしてスティーブンスの黒子の中にこそ彼が求めているのが、深い人間性普遍的なものを求めていく安堵感であることを感じるのである。

以上

安部・有地法律事務所 所長